

# エマソンの『自然』における母なる自然と 子の神話

持 留 浩 二

## 序

エマソン (Ralph Waldo Emerson) の作品を読みにくくしているいくつかの要因の一つに、彼が繰り返し反復して同じテーマを述べ続けるというものがある。例えば、彼のエッセイの中でもとりわけ論理の混乱が見られる「運命」(“Fate”) という作品を見てみると、自由意志と運命という論理的には決して解決できそうにない問題を彼は延々と論じ続けるのである。オキーフ (Richard R. O’Keefe) は『ラルフ・ウォルドー・エマソンの神話的元型——ブレイクの読み——』(*Mythic Archetypes in Ralph Waldo Emerson: A Blakean Reading*) の中で、エマソンのエッセイが理解しがたい理由は、読者の多くが当然のようにエマソンの作品を論理的な散文として読むのに対し、「エマソンの「エッセイ」は少しも「エッセイ」などではなく、詩なのかもしれない」(2) と述べている。また斎藤光著『エマソン』の中では、「しかし『自然論』全体の調子は自然と神と人間のハーモニーに陶醉した詩人の散文詩——という点に見られる。……エマソンは思想家、宗教家として語っているのだが、結局は詩人の文章である」(85—86) と指摘されている。それならばエマソンの作品を理解し難くしているいくつかの問題もある程度解決しそうである。詩の目的は、何らかの結論を論理的に提示することではなく、その詩自体を味わうことにある。答えが目的ではなく、そのプロセス自体が目的なのだ。オキーフの言うように、エマソンの作品が本当に詩であるならば、彼の作品のメッセージを読みとることと同じくらいに、そのプロセス自体に一体何が読みとれるのか

重要になってくる。そこでエマスの『自然』(Nature)におけるプロセスに注目すると、そこには「母なる自然」と「子としての人間」との様々に変化する関係を読みとることができるのである。この論文では、『自然』における、変遷してゆく「母なる自然」と「子としての人間」の関係を探っていきたい。

## I

『自然』には、後のエマスの思想、例えば自己信頼という思想、を先取りしているものも含まれている。彼の自己信頼という思想は唯心論から来ているのだが、『自然』で彼が主張しているのはこの唯心論に他ならない。この作品の中でのエマスの主張を要約すると次のようになる。自然は重要である、なぜなら自然は精神を、つまりは神を、映し出す鏡であるからだ、というものである。これはスウェーデンボルグ (Emmanuel Swedenborg) より影響された考えで、「照応」(“correspondence”)と呼ばれるものである。この作品における自然と精神とは、互いを照応しているパラレルなものであると同時に、内界と外界を隔てる境界を中心とする対立項でもあるという複雑な関係にある。しかし、この作品を貫いている唯心論的主張は自然を精神に従属するものとしてしまう。彼のこの唯心論的主張は果たして正しいものと言えるのであろうか。実はそれが大きな疑問であるのは、後のエマスの作品にはそのような唯心論的楽観主義への反動とも言うべき主張が表れるようになるからである。ホイッチャー (Stephen E. Whicher) は「手法の問題」(“The Question of Means”)の中で「1836年に彼が抱いていた自然への野生的な詩的喜びから生じうる神聖な歓喜への幻想は1844年頃までには消滅してしまったのだ」<sup>(24)</sup>と言っているが、確かにエマスの作品における自然の意味はそこから大きく変わる。1844年というのは「自然」(“Nature”) (1836年に発表された『自然』とは違う) が発表された年である。この「自然」や1853年に発表された「運命」(“Fate”)という作品には、明らかに精神に対する自然の逆襲とも言うべき反動が見られる。こういうことは言えないだろうか。つまり『自然』における自然に対する不当な取り扱いがエマソンに「自然」や「運命」という作品を書

かせたのではないか。不当な地位を与えられた自然はそこにおいて正当な地位を回復されねばならなかったのではないだろうか。

## II

エマソンの『自然』が伝えようとするメッセージそのものは以上のように、一言で言えば、唯心論となる。しかし最初に述べたように、もしエマソンの作品が詩であるなら、この一見ありふれたメッセージを読みとることにあまり意味はないのかもしれない。そこでこれから『自然』という作品のプロセス自体に注目していきたい。

まず『自然』において自然という言葉に一体どういう意味合いが込められているのかということに注目したい。まず、エマソンは自然を「産む母」に譬えている。「自然が言う、彼は私が産んだ子で、あらゆる見当違いな悲しみにもかかわらず、きっと私のことを喜ぶだろう」(9)。この描写は、自然を母とし、人間をその子としている。オキーフは「エマソンが文芸の人であり、詩的な意匠や方法や修辞法を用いる作家であることを明らかにするアプローチの方がより有益かもしれない。そういった意匠、方法、修辞法はエマソンの作品において、元型や神話といった形で表れているのである」(2)と指摘しているのであるが、エマソンの自然には普遍的な母の神話的元型のイメージが認められる。

『パンの祭司としてのエマソン——性の形而上学の研究——』(*Emerson as Priest of Pan: A Study in the Metaphysics of Sex*)の中でチューリン(Erik Ingvar Thurin)はそれを「グレート・マザー」(“the Great Mother”)と呼んでいる。このように自然には普遍的な母の神話的元型「グレート・マザー」のイメージを認めることが出来るであろう。それに対して、人、さらには人の精神にはその「子としての英雄」の元型が当てはまるだろう。そうすると『自然』に一つの神話のイメージ、「グレート・マザー」と「子としての英雄」の神話のイメージを見ることが出来るのである。

そこで『自然』における最も有名な「透明な眼球」(“transparent eyeball”)に関する一節に注目したい。

In the woods, too, a man casts off his years, as the snake his slough, and at what period soever of life is always a child. In the woods is perpetual youth. . . . In the woods, we return to reason and faith.

There I feel that nothing can befall me in life, —no disgrace, no calamity (leaving me my eyes), which nature cannot repair. Standing on the bare ground, —my head bathed by the blithe air and uplifted into infinite space, —all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball ; I am nothing ; I see all ; the currents of the Universal Being circulate through me ; I am part or parcel of God. (9—10)

この描写はいろいろな解釈を許すであろう。一般には神との神秘的合一をイメージさせるものと言えるだろうが、ここでは先程言ったような「グレート・マザー」と「子としての英雄」という神話的元型の枠組みで解釈してみたい。まず森の中へ入っていくことは「グレート・マザー」へ帰っていくこと、つまり母胎への回帰のイメージとしてとらえることが出来るだろう。「そこにいれば……どんな恥辱も、どんな災いも起こることはないと感じる」という言葉は、母胎の中はあらゆる外の世界から遮断されており完全に安全であるということの意味していると解釈できる。そして「一個の透明な眼球」のイメージは主客一体のイメージと受け取れるが、このイメージは私という主体が生まれる以前の世界、つまり母胎の中で母と一体であった頃のイメージを想起させる。しかしながら、「私は完全に神の一部だ」という言葉には少しばかり注意を払う必要がある。なぜなら神は主に、特にユダヤ・キリスト教においては、男性の性格を与えられることが普通だからである。そこで、この描写は母との一体化なのか父との一体化なのかという疑問が残ることになる。

そこで、自然と神と精神という三者の関係を整理してみる必要がありそうだ。この三者はエマスン思想の鍵となる概念である。「眼の円」(“The Circles of the Eye”)の中でコックス (James M. Cox) が「三つの全要素——神、人間、自然——は明らかに互いに浸透しあっており、そしてエッセイを通してエマスンのロジックはこの三者を平等な関係に置きたがっている」(48)と言うように、この三者は互いにパラレルな関係にある。その点ではこれらの間に同一性は認められる。しかし互いに異なる面も持っている。チューリンは、

エマスが「女性原理を地上のものと、男性原理を天上のものと(x)」結びつけていると指摘しているが、この考え方をもとにすると次のような構図が浮かび上がる。地上の世界として「母なる自然」には女性の性格が与えられている。他方、天上の世界のものと、神には男性の性格が与えられることになる。この二者にはこの他にも異なる面がある。自然は物質と結びついているが、神は精神と結びついている。それゆえに自然は有限世界と結びつくが、神は永遠の世界と結びつくことになる。そこで人間の精神はどうかというと、人間は物質と精神の両方から成っている。物質的な面は有限であるが、精神的な面は永遠なる世界とつながりがある。このように人間は自然という女性と神という男性の両方の要素を持っているのだ。つまり、人間は「母なる自然」と「父なる神」の子供という性格を持っていると言えるのではないだろうか。それであれば、先程の「私は完全に神の一部だ」という描写にも一つの説明がつきそうである。母と父によって産まれる子であるがゆえに、まだ母胎の中にいる状態においては母とも父とも未分化の状態にあるわけである。つまり母の一部でもあるが、父の一部でもあるのだ。

以上のように、『自然』の中には、まずはじめに母とも父とも未分化の状態にある「母胎としての母」というイメージをとらえることが出来るだろう。すると、次に「養い育てる母」としての自然のイメージが表れてくる。「私たちが天空を漂うのを可能にしているこの緑の球体の上で、私たちを助け、喜ばせるためになされている安定して豊富な物資の供給を調べると、人間の悲惨さなど子供じみた癩癩のように見える」(12)。ここには肯定的な「グレート・マザー」のイメージが見られる。

しかしながら、次第に「養い育てる母」から「子に奉仕する母」へとイメージの変化が見られるようになる。「自然は、人間に仕えるにおいて、材料であるだけでなく、プロセスでもあり結果でもある。全ての部分が人間の利益のために絶え間なく協力しあう」(13)とエマスは言う。ここで「母なる自然」と「子としての人間」の力関係が逆転しているのが分かる。自然が人間のために役立とうとしているとエマスは主張しているのである。ホダー(Alan Hodder)は『エマスの啓示のレトリック——自然、読者、そして内に含まれる

啓示——』(Emerson's Rhetoric of Revelation : Nature, the Reader, and the Apocalypse Within)の中で、エマソン作品における自然と精神の関係について次のように言っている。「無知の間は、母親に対する子供のように、人間は自然を敬う。しかし自意識が目覚めるにつれ、彼の態度に変化が出てくる。次第に、彼は自然の中に配偶者の姿を見出すようになり、ついには彼自身の立派な性質のみを見出すことになる。彼は自然を足下に置き、支配するようになる」(27-28)。ホダーが言うように、『自然』の中では「子としての人間」よりも「母なる自然」の方が低い位置に置かれている。「母なる自然」が子を産み、子はその母の胸に抱かれて栄養と愛情を与えられ養い育てられる。しかし子は近いうちに一人の大人として独立せねばならなくなる。多くの英雄神話においては、大人になる時期にきた子供が、大人になるためのクエストに出発するために家を出て旅立つところから物語は展開する。一人立ちしようとする子にとって、母は次第に克服すべき存在となる。「養い育てる母」から「子に奉仕する母」への母の地位の低下はこのような子の一人立ちと関わっているように思われる。一人立ちするために力を持ちはじめなければならない子にとって、母の地位の低下は是非とも必要になってくるのだ。

一人立ちしようとする子には、これまではありがたかった母の存在が邪魔になり始める。「養い育てる母」という肯定的なイメージは、その影に「束縛する母」という否定的な面を持ち併せている。これが「グレート・マザー」という元型の光と影である。一人立ちしようとする時期に来た子にとっては、これまでの「養い育てる母」というイメージは、今度は逆に「束縛する母」というイメージに取って代わられる。しかし『自然』には「グレート・マザー」の否定的な面は明確には意識されていない。実はこのイメージは後の作品「自然」や「運命」の中に表れている。「子としての英雄」は『自然』においては一見容易に独立を果たしているように見えるのであるが、実のところは、この「グレート・マザー」の暗黒面が一時的に抑圧されているのだと考えられる。

『自然』においては、「グレート・マザー」の否定面は、「母なる自然」に対する人間の一方的な優越性にとり代わられている。そしてその不当な「グレート・マザー」の抑圧は、「母なる自然」をあくまでも「鏡像としての自

然」というこれまた不当な立場へと追いやってしまうのである。彼は言う、「しかし自然の美は究極のものではない。それは内にある永遠の美を告げるものであって、そのみで実体あり満足のいくものではない」(24)。それゆえに、「世界は象徴なのだ。語られる言葉のあらゆる部分がメタファーなのだ。なぜなら自然全体が人間の心のメタファーだからだ。道德本性の法則は、鏡に映った顔と顔のように、物質の法則と一致する」(32—33)ということになる。

このように自然の世界そのものの実体は徐々に欠如されてゆく。このような「母なる自然」に対する「子としての人間」の優越性は次の描写でも明らかである。「自然は終始仲介者だ。それは奉仕するために作られている。それは、救世主がのったロバのようにおとなしく人間の支配を受け入れる」(40)。ここでエマスは自然と人間関係を「ロバとその上の救世主」というイメージでとらえている。このイメージについてチューリンは、「それは『自然』の中でエマスが言っている別の言葉と完全に一致する——つまり、人と結婚する上で自然の位置は人よりも下にあるということなのだ」(5)と的を得た指摘をしている。しかしながら、この「ロバにのった救世主」という英雄的な人間のイメージは、後のエマスの作品において大きな変容を強いられることになる。

「自然」や「運命」においては、自然は、人間に支配されるものではなく、逆に人間を支配する力を持つものであることが強調されるようになる。この自然の二つの顔、それを「自然」の中でエマスは「産み出された自然」(“natura naturata”)と「生み出す自然」(“natura naturans”)という二つの概念に分けて整理している。『自然』においては自然という一つの言葉で語っていたのであるが、おそらく一つ概念だけでは十分ではないという理由で、エマスは「自然」においてその自然が持つ二つの顔を分離する必要性を感じたのであろう。それと同時に、以前は「産み出された自然」が論じられることが多かったが、「自然」や「運命」という作品においては「産み出す自然」が問題にされるようになる。『自然』における「ロバにのった救世主」というイメージは明らかに前期の楽観主義的なエマスにおける「産み出された自然」を前提としたイメージであるが、「自然」や「運命」においてはこれとは正反対のイメージが見られるのである。

まず「自然」では、エマソンは人間を「自然おかかえの道化」(“fools of nature”)としてとらえている。さらに「運命」の中では、人間はサーカスの曲馬師のように「公的な本性」という馬と「私的な本性」という馬の両方に代わる代わる乗らなければならないという描写が見られる。『自然』においては柔らかなイメージのロバであったのに対し、「運命」では馬となっており、しかもその馬は二頭になっている。さらに、上に乗っているのも、『自然』では救世主という英雄的なイメージが用いられていたのに対し、「運命」ではサーカスの曲馬師という威厳に欠けたイメージが用いられている。「自然」にいたっては、人間は「自然おかかえの道化」に成り下がってしまっているのである。ここからもエマソンが『自然』においては自然に対していかに不当に低い位置しか与えなかったかがよく分かる。『自然』後半部の「唯心論」の章へ入ると、「子としての人間」は文字通り英雄となり、ひたすら高みへと昇りつめる。そして当然のことながら自然は物質として否定される。ロバと救世主であれば、勝負は見えているわけである。

しかし本来、「母なる自然」は「子としての人間」の生命の源である。子が少年期を過ぎて一人立ちするときに母なる自然に嫌悪を抱くのは当然だとしても、生命の源としての母はあくまでその絶対的な立場を失うわけではない。「子としての人間」は、いくら「母なる自然」を嫌悪し、その価値を貶めたとしても、そこから生命を授けられたという子としての本来的な立場を消し去ることは出来ない。それを否定することは、そのまま自らの生命の源を否定することにつながるからだ。ここに、「子としての人間」の「母なる自然」に対するアンビヴァレンスな感情が生まれる。次の引用箇所にはそんな複雑な感情がよく表れている。

But I own there is something ungrateful in expanding too curiously the particulars of the general proposition, that all culture tends to imbue us with idealism. I have no hostility to nature, but a child's love to it... Let us speak her fair. I do not wish to fling stones at my beautiful mother, nor soil my gentle nest. I only wish to indicate the true position of nature in regard to man, wherein to establish man



all right education tends ; as the ground which to attain is the object of human life, that is, of man's connection with nature. (59)

エマスはここで、唯心論への傾倒が「恩知らず」であると言う。どんどん高みへと上昇しようとした反動が幾分ここで出てきていると言える。子としての立場をすっかり忘れていた人間の側に、一瞬、子としての本来的な立場が「母なる自然」より突きつけられたかのようなのである。しかしながら、「私は自然に対して全く敵意など抱いていない」という言葉は言い訳程度にしか聞こえない。「唯心論」の章の間中ずっと、エマスは自然を人が忌み嫌うべき物質として描いているからである。そしてそのメッセージが『自然』全体の主張でもある。上の引用箇所の後半部の描写は、「母なる自然」に対する罪悪感を感じつつも、そこから離れて前進し続けるべきなのだというこれまでの態度に変化がないことを示している。

それからエマスは、最後を、「私の詩人」の言葉として次のように締めくくる。

“Nature is not fixed but fluid. Spirit alters, moulds, makes it. The immobility or bruteness of nature is the absence of spirit ; to pure spirit it is fluid, it is volatile, it is obedient. . . . So fast will disagreeable appearances, swine, spiders, snakes, pests, mad-houses, prisons, enemies, vanish ; they are temporary and shall be no more seen. . . . The kingdom of man over nature, which cometh not with observation, —a dominion such as now is beyond his dream of God, —he shall enter without more wonder than the blind man feels who is gradually restored to perfect sight.” (76—77)

この引用箇所は、英雄の側の、「グレート・マザー」に対する一方的な勝利宣言のようである。「母なる自然」を従順と形容し、そしてその「母なる自然」の否定的な面を、「豚」、「蜘蛛」、「蛇」とし、まるでそれらが存在しないかのような断定をしている。チューリンは、エマスにおける「蛇」や「蜘蛛」というイメージが、否定的な「呑み込み、束縛する女性」を象徴していると指摘している(90—91)。「蜘蛛」、「蛇」は、「気違い病院」、「牢獄」同

様、「呑み込む母」、「束縛する母」としての「グレート・マザー」の否定的な面を象徴しているのであろう。しかし、ここでエマスンはそういった不愉快な仇敵はかりそめのもので見えるうちに消えてしまい二度と見ることはないのだと頑なな態度で一蹴している。そして最後に、自然を支配する人間の王国の前に英雄は最高の高みへと到達する。

これまで、母と子の神話という枠組みでエマスンの『自然』を見てきたわけであるが、母と子というと、まずフロイト (Sigmund Freud) のエディプス・コンプレックスが想起されるであろう。『自然』の冒頭で、エマスンは「母なる自然」と「子としての人間」を、「非我」(“NOT ME”)と「自我」(“ME”)と言い換えているのであるが、オキーフは、『自然』という作品を「非我」を「自我」へと統合する試みであると初めて指摘したのはホイッチャーであると指摘した上で、その考えをエディプス・コンプレックスの枠組みで解釈している。

Now, the most primary models of the human being assimilating and transforming the NOT ME into the ME is quite obviously the child at his mother's breast ; he is engaged in the act of eating the mother, and the mother, at the earliest stage of the infant's development, is essentially all of the NOT ME that he can perceive. The mother is the totality of “nature” in the child's world. (96)

オキーフは『自然』を「母を食べる」物語であるとしている。さらにオキーフは彼のエディプス論を強化するために、父殺しのイメージの説明も忘れない。彼によれば、エマスンの作品には、人間が自然としての母との再結合を果たすために神としての父の殺害が描かれているというのである。オキーフによれば、エマスンは「アメリカの学者」において、ヨーロッパの知性の伝統という父を殺し、「神学部講演」において、組織化されたキリスト教制度という父を殺したというのである。

しかし私にはオキーフのエディプス論よりも以前に言及したホダーの意見の方が説得力があるように思われる。オキーフのエディプス論によれば、人間は「母なる自然」との再結合を求めているということになるのだらうが、そのよ

うな結合のイメージははじめの「透明な眼球」の描写には見られたものの、その後はもっぱら「母なる自然」を支配しようとするイメージが顕著になるからである。やはり、『自然』は「子としての人間」による、「母なる自然」への再結合を求める物語ではなく、「母なる自然」を支配しようとする物語だと見る方が自然ではないかと思われる。

しかしこれまでも言ってきたように、自然を支配することは不可能である。「エマソンの求める自然の考えは、言うまでもなく、容易く手に入るものではない。自然の影響から彼が求めたインスピレーションは、捉え難く、幻みtainなものであった。人間は、自然の説明を獲得することによって自然の無意識の中に浸ってしまうことはできず、意識を通して自然を征服することもできない。彼は一連の神話的なパラレルで自らのフラストレーションをイメージしたのだ」(27)とホイッチャーが言うように、『自然』は本来支配できないものを支配しようとした無謀な英雄の物語なのである。

## 結 び

冒頭にも述べたように、エマソンの『自然』という作品のメッセージは唯心論という一見単純なものである。しかしもしエマソンの作品が詩であるならば、この唯心論というゴール同様に、そのゴールへと至るプロセス自体が問題にされるべきであろう。

ここではそのプロセスを「母なる自然」と「子としての人間」という神話的イメージでとらえてきた。まず「母胎としての母」と未分化であった段階から「養い育てる母」に育てられる子という段階へと至り、次に母は「子に奉仕する母」という以前よりも劣等な地位を与えられる。本来ならここで「グレート・マザー」は、否定的な「呑み込む母」、「束縛する母」という形をとりそのようなものだが、そういうイメージは見られない。『自然』においては、そのような否定的なイメージは抑圧されているように思われる。そして「子としての人間」という英雄は、自らの生命の源としての母に対して、自分が恩知らずであるというアンビヴァレンスな感情を抱きつつも、最高の高みへと昇りつめる

のである。

『自然』の特徴は「グレート・マザー」に対する英雄の一方的な勝利にある。母の側から見れば、それは余りに不当な敗北である。しかし、その抑圧された「グレート・マザー」の否定面は後に「自然」や「運命」という作品においてその反動を明らかにすることになる。束の間の勝利に酔っているであろう「ロバにのった救世主」は近い将来に大きなしっぺ返しを食らうことになるのだ。

### Works Cited

- Cox, James M. "The Circles of the Eye." *Emerson: Prophecy, Metamorphosis, and Influence*. Ed. David Levin. Columbia University Press, 1953. Rpt. in *Raldo Waldo Emerson*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1985. 45—60.
- Emerson, Ralph Waldo. *Nature. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. 2nd ed. Vol. 1. Boston: Houghton Mifflin, 1904. New York: AMS, 1979. 1—77.
- Hodder, Alan. *Emerson's Rhetoric of Revelation: Nature, the Reader, and the Apocalypse Within*. University Park: Pennsylvania State UP, 1989.
- O'Keef, Richard R. *Mythic Archetypes in Ralph Waldo Emerson: A Bleakean Reading*. Kent: The Kent State University Press, 1995.
- Thurin, Erik Ingvar. *Emerson as Priest of Pan: A Study in the Metaphysics of Sex*. Kansas: The Regents Press, 1981.
- Whicher, Stephen E. "The Quetsion of Means" *Freedom and Fate: An Inner Life of Ralph Waldo Emerson*. The University of Pennsylvania Press, 1953. Rpt. in Harold Bloom 13—28.
- 斎藤光. 『エマソン』. 研究社, 1969.